

主 題：信仰の自己診断 1

聖書箇所：ヨハネの福音書 13章31-35節

ヨハネの福音書13章をお開きください。この13章は主イエス・キリストが愛する弟子たちと最後に夕食をともにされたときの様子が記されています。一般的に「最後の晩餐」と言われているそのときです。13：1には「さて、過越の祭りの前に、この世を去って父のみもとに行くべき自分の時が来たことを知られたので、世にいる自分のものを愛されたイエスは、その愛を残るところなく示された。」と書かれています。過越の食事をされたのです。そして、イエス・キリストだけが「自分の時が来たことを知られたので、」とあるように、いよいよイエスがこの世に来られた目的である十字架が近づいて来たのです。

今日、私たちはこの「最後の晩餐」の様子を見ていきます。特にこの中で、主イエスご自身が私たちクリスチャンにお与えになった「新しい戒め」ということを見ていきます。それこそが当時の弟子たちに、そして、今の私たち、イエス・キリストの救いに与ったひとり一人に神が今望んでおられることです。そのことを今日ごいっしょに見ていきたいと思えます。

ここで「最後の晩餐」のときの出来事を時系列に見ましょう。皆さんの頭の中で整理してください。

- (1) 過越の夕食をどこで取るのかと弟子たちが主イエスに尋ねます（マルコ14：12-16）。
- (2) エルサレムの2階の広間に12弟子たちと主ご自身がともに集まります（マルコ14：17）。
そして、最初に主イエスが弟子たちの足を洗います（ヨハネ13：1-20）。これらの出来事はマルコ14章、マタイ26章、ルカの22章に出て来ます。そこで皆が食事の席に着きます。
- (3) イエスはご自分を裏切る者の存在とその正体を明らかにされました（マルコ14：18-21）。
この中の一人がわたしを裏切ると言われ、それがいったいだれなのかということをお話されたのです。
- (4) その後、弟子たちは自分たちの中でだれが一番偉いのかということをお話しています（ルカ22：24-30）。
- (5) そして、ペテロにとって大変衝撃的なことが告げられます（ヨハネ13：36-38、ルカ22：31-38、マルコ14：26-31、マタイ26：30-35）。それはペテロが主を三度否定するということです。
- (6) そして、最後に弟子たちは主ご自身から「聖餐式」について教えを受けます（マルコ14：22-25）。

今日、私たちは礼拝後に聖餐式に与りますが、非常に大切なことが教えられるのです。この最後の晩餐のとき、イエスは何を為さったのか？弟子たちに対して模範を示されたのです。最後の最後まで、イエスは弟子たちに対して、そして、私たちに対して、信仰者としてどうあるべきかというその模範を示されました。

A. 主が示された模範 31-33節

13：31からから見てください。「：31 ユダが出て行ったとき、イエスは言われた。「今こそ人の子は栄光を受けました。また、神は人の子によって栄光をお受けになりました。：32 神が、人の子によって栄光をお受けになったのであれば、神も、ご自身によって人の子に栄光をお与えになります。しかも、ただちにお与えになります。：33 子どもたちよ。わたしはいましばらくの間、あなたがたといっしょにいます。あなたがたはわたしを捜すでしょう。そして、『わたしが行く所へは、あなたがたは来ることができない』とわたしがユダヤ人たちに言ったように、今はあなたがたにも言うのです。」、ここでイエスは「人の子は栄光を受ける」こと、そして、「神も人の子によって栄光を受ける」ということを言われました。何のことを言われたのでしょうか？

1. 栄光を受けられた主：「今こそ人の子は栄光を受けました。」

「人の子」とは「救世主」のことと皆さんはお分かりでしょう。約束の救世主です。ダニエルがダニエル書7章で預言していた「約束の救世主」のことです。7：13-14「：13 私がまた、夜の幻を見ていると、見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られ、年を経た方のもとに進み、その前に導かれた。：14 この方に、主権と栄光と国が与えられ、諸民、諸国、諸言語の者たちがことごとく、彼に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。」つまり、イエス・キリストご自身です。イエス・キリストが栄光をお受けになるということなのです。

では、「栄光を受ける」とはどういう意味でしょうか。「誉め称えられる、崇められる」ということで、イエスはご自身が人々から誉め称えられ、人々から崇められるということをお話されたのです。

◎なぜ、イエスが誉め称えられ崇められるのか？その理由、

1) 神だから： 私たち被造物は神を称えるために造られました。しかし、残念ながら、多くの者はこの神を崇めることなく、神でないものを神として崇めています。でも、すべての創造主である真の神だけ

が称賛に値するお方です。だから、この方はすべてのものによって崇められるお方です。

2) 罪人のために完全な救いを成し遂げられたから : イエス・キリストのこのみわざのゆえに、誉め称えられ崇められるのです。すべてはあの十字架です。イエスは「今こそ人の子は栄光を受けました。」と言われました。イエスのご自分がこの世に来たその目的を果たすときが遂に来たということと言われたのです。見ていただきたいのは「受けました」という動詞です。この動詞の時制は日本語で見てもこれは過去のこととして話しています。でも、このときイエスはまだ十字架に架かっていないのですから、未来のこととして話すはずで、「受けます」と。でも、イエスは過去のこととして話されました。

実は、この時制は不定過去でも特にドラマチック不定過去という独特の使い方がされているのです。日本語では劇的不定過去とでも言えます。これは、これから起こること、それが将来のこと、未来のことであってもその確実性を表しているのです。絶対に起こることだと言うのです。だから、イエスはまだ十字架に架かっていないのに、あたかも架かったかのように話しているのです。それが確実に起こることだからです。イエスはそれを避けて通りません。確実にそれをご自分の身に負われるのです。なぜなら、イエスはそのためにこの世に来られたからです。実際に、この最後の晩餐の翌日にイエスは十字架に架けられます。

主イエス・キリストは私たち罪人の罪を取り除くためにこの世に来られました。完全な罪の赦し、救いをもたらすためにイエスが来てくださり、そして、私たちの身代わりの十字架が今まさにご自分の前に迫っているのです。天使はイエス・キリストの誕生を告げました。ルカ2:11「きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。」と。バプテスマのヨハネはイエスが自分のほうに来られるのを見てこのように言いました。ヨハネ1:29「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。」と。これらの証言が明らかにしていることは、このイエス・キリストこそ私たち罪人の罪を取り除いてくださる方、私たち罪人に救いの希望をもたらしてくださる方、そのことを告げています。そして、まさにその十字架の出来事が起ころうとしていたのです。

今話したように、この翌日イエスは十字架に架かっていかれました。イエスの弟子たちは自分たちも捕らえられると恐れて逃げていきました。でも、確かに、イエス・キリストの十字架によってイエスは栄光を現わされたのです。覚えていますか？ローマの百人隊長が口にしたことばを…。彼はイエス・キリストの十字架の有様を見てこう言います。ルカ23:47「この出来事を見た百人隊長は、神をほめたたえ、「ほんとうに、この人は正しい方であった」と言った。」。彼はすべてのことが分かったわけではなかったでしょう。でも、その光景を見て彼は神を称えるのです。イエスがどのようなお方か少しは知ることができたと、彼がこのように神を誉め称えている様子を私たちは見るのです。

問題は、イエス・キリストがなぜ十字架に架かったのか、何のために架かったのか、だれのために架かったのかと、そのことを知っている私たちがこのイエス・キリストを誉め称えているかどうかです。イエス・キリストこそが誉め称えられるにふさわしいお方であり、すべての称賛にふさわしいお方です。私たちはイエス・キリストの十字架を見上げ続けていくことが必要なのです。

◎私たちがイエス・キリストの十字架を見上げるときにそこに何を見るか？

- ・「**私の神**」を見る : 私を造ってくださり、私を愛してくださり、私をこの世においてくださり、いのちを与えてくださっているその神が私の身代わりとなって死んでくださったのです。
- ・「**私の救い主**」を見る : 身代わりとなって死んでくださったお方です。罪の無い方が罪ある私たちの身代わりとなっていていのちを捨ててくださったのです。私たちが味わうべき苦しみ痛みを、その罰を私に変わって受けてくださったのです。
- ・「**永遠の希望**」を見る : 私たちは生まれながらに永遠の希望などありませんでした。私たちを待ち受けていたのは永遠の滅びでした。一番ふさわしい永遠の地獄でした。そして、その地獄に向かってまっしぐらに進んでいたのです。でも、イエス・キリストが十字架に架かってくださることによって、私たちはそこに希望を見出すのです。救いの希望です。この方によって私たちは永遠のいのちをいただき、私たちはこの方とともに永遠を過ごすことができます。皆さん、希望を持って生きていますか？日々、肉体は弱っていても私たちの信仰は強まっていくはずで。私たちはイエスにお会いできる、イエスの御顔を拝することができるその日が近づいているのです。私たちは希望を持って生きる者たちです。なぜなら、あの十字架がその希望をくれたからです。
- ・「**完全な勝利**」を見る : それまで私たちは罪に対してどうすることもできませんでした。死に対してもどうすることもできなかった。でも、イエス・キリストが十字架で死んでくださり、その死から敢然とよみがえってくださったことによって、私たちがどうすることもできなかった死に対しても、罪に対しても勝利されたのです。イエスの十字架が私たちに完全な勝利を約束してくれたのです。

十字架を見上げることがどれほど大切なことか！！私の神がああ十字架で身代わりとなっていていのちを捨ててくださった、この尊い犠牲によって私たちは救いをいただいたのです。ペテロは言います。I ペテ

ロ2：24「そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。」。私たちは癒されたのです。罪から完全に癒され、そして、私たちは聖くされ、神の子どもとされ、そして、永遠が保証されました。だから、私たちはこの方を誉め称えるのです。この方は神であられ、同時に、この方は私たちのためにこんな大きな犠牲を払ってくださったのです。

信仰者の皆さん、私たちはこの生活を送っているのです。いや、送るはずです。なぜ、私たちが礼拝者として生きているのですか？礼拝者として生まれ変わった私たちは、日曜日のこの時間に集まっているならそれですべてが良いわけではありません。私たちは日々礼拝者として生きているのです。当然のことでしょう。この神は称賛に値するお方だからです。この方を誉め称えながら生きていくという、今までは歩むことのできなかつた新しい歩みを、私たちは与えられた救いによって為すことができるようになったのです。イエスは言われました、「人の子が栄光を受けるその時が来た」と。

2. 栄光を受けられた神 : 「神は人の子によって栄光をお受けになりました。」

神がただ栄光をお受けになったとは書かれていません。「人の子によって」と書かれています。つまり、イエスによって父なる神が栄光をお受けになったということです。どのように父なる神が栄光をお受けになったのですか？それは「主イエス・キリストの従順な歩みによって」です。主イエス・キリストがすべての点において完璧に父なる神のみこころに従うことによって、父なる神は栄光をお受けになったのです。ヨハネ17：4には「あなたがわたしに行わせるためにお与えになったわざを、わたしは成し遂げて、地上であなたの栄光を現しました。」とあります。イエスは父なる神の栄光を現したのです。100%、完璧に父なる神のみこころに従うことによってそのことを為されたのです。

だから、私たちはみことばを学んでいるのです。なぜなら、みことばによって私たちは神のみこころを知るからです。そして、その示される神のみこころに従うことによって、私たちもこの神の栄光を現すことができるのです。自分勝手な方法で神の栄光を現すことなどできません。みことばが教えるのは神のみこころに従うことです。イエスはその点において完璧な模範を私たちに示してくださったのです。100%父なる神のみこころに従ったゆえに、彼は100%神の栄光を現し続けたのです。

「わたしは成し遂げて」と言われました。何を成し遂げたのですか？この地上にあって、人として父なる神のみこころに対してそれをすべて成し遂げたということです。ヘブル書12：2をご覧ください。「信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをもものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。」、注目していただきたいのは「ご自分の前に置かれた喜びのゆえに」ということばです。イエスはすべてにおいて従順だったと今話しましたが、その歩みの動機がこのように書かれています。イエスが神のみこころに従順に従われたその動機は「喜びのゆえに」です。十字架によって、その身代わりによって、イエスを信じて罪の赦しをいただく者が起こるからです。あなたのことです。そして、あなたがこの主を心から誉め称える者になることによって、確かに主はお喜びになるのです。

動機はただその喜びだけではないはず。イエスが人としてこの地上を歩んでおられるときに、彼の従順な歩みの動機となっていたことは「喜び」とともに、「父なる神を喜ばせること」です。父なる神を喜ばせようとすれば、今見て来たように、父なる神が「これをしなさい」と言われること、命じておられること、望んでおられること、つまり、神のみこころを行うことでしょう。神のみこころに逆らっていてどのようにして神を喜ばせることができるでしょう？神のみこころはみこころ、私の考えはこう、だから、それに従って生きていきますと、このような不従順な人がどのように神の栄光を現すことができますか？どうして神の喜ばれる生き方をしていると言えますか？イエスが示してくださったその模範は「完璧にみこころに従って神の栄光を現した」ことです。なぜなら、イエスは父なる神が喜ばれることを願いながら、そのためにみこころに従われたからです。

イエスは天に凱旋した後「神の御座の右に着座された」と、このことは今読んだヘブル書12：2にも、また、ヘブル書1：3にも書かれています。ヘブル1：3「御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現れであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。また、罪のきよめを成し遂げて、すぐれて高い所の大能者の右の座に着かれました。」と。「着座した」というのは、すべての働きが終わったからです。この地上に来られたそのすべての務めが終わったのです。イエスは救い主として来られ、救いを備えてくださり、そして、天に凱旋して父なる神の右の座に着座された。働きが終わったのです。そして、そのイエスの歩みのすべては、一言で表わせば「従順」だったのです。父なる神のみこころに従順だったのです。神の栄光を現したいと願っている者たちにこの模範が明らかです。もし、あなたがそれを望んでいるなら、イエスが歩まれたように生きることです。神のみこころに従うことです。あなたの願いではありません。あなたの願いはみこころに従うことを邪魔します。どうすれば良いのでしょうか？あなたの願っていること、あなたの考えていることを全部捨てることです。そして、神が示してくださることに従って

くのです。

みこころを求めていながら、自分の願っているこのことだけは「捨てることができません」とも言っただとするなら、本当にみこころに従おうとしていたのか疑われるでしょう。みこころに従うということは自分の考えていることや、望んでいること、自分がどんなに願っていることであっても、みこころの中で喜んで捨てることができるかどうかです。覚えてください、皆さん。神のみこころはあなたにとって最善だからです。あなたの考えがもたらすことは最善ではないのです。そのことをあなたは学ばなければいけないのです。

イエスは従順な歩みによって神の栄光を現わされました。確かに、そのことを主ご自身がこの31節で教えておられるのです。同じことが32節でも繰り返されています。「神が、人の子によって栄光をお受けになったのであれば、神も、ご自身によって人の子に栄光をお与えになります。しかも、ただちにお与えになります。」と。今見て来たように、イエスは完全な歩みをもって父なる神の栄光を現しました。父なる神もイエス・キリストによって栄光をお受けになることは、救いが備えられてイエスを信じる者たちがイエスを誉め称えることでイエスご自身が栄光をお受けになることで示されるのです。

このイエスの十字架を今私たちは見て来ましたが、私たち信仰者にとって十字架はどのようなものでしょう？

◎十字架とは？： 救いの尊さを示している

私たちの神がどのような神なのかを教えてください

(1) 神の愛の深さ＝私たちはイエスの十字架を見た時に、神というのは「愛のお方」であることを学びます。イエスはただことばだけであなたのことを「愛している」と言ったのではありません。イエスはご自分のいのちを捨てるという行為をもってあなたを愛していることを明らかにされたのです。神はあなたのことを愛している。それはどんな愛で愛してくださっているのかを十字架で証明したのです。(2) 神の聖さ＝神は聖い方です。罪を放っておかれません。罪は必ずさばかれるのです。私たちはそう信じたくないです。上手く生きて人生が終わってそれでいいではないか…とと思っているかもしれませんが、聖書が警告するのは、必ず、一人ひとり自分の罪のさばきを受けるということです。神は聖い方でどんな罪をも「もういい…」とはおっしゃらない。罪をどれほど憎んでおられるのか、そのことを十字架を見た時に覚えるのです。神だから「もう赦した!」、それで良かったのではないかなぜ、わざわざイエスが十字架に架かる必要があったのでしょうか？と…。いいですか！十字架は私たちに神がどんなお方であるかを教えてくれているのです。神は罪を必ずさばかれるお方です。これまでもそうだったようにこれからもそうです。今の世の罪を放っておかれる方ではありません。必ずさばかれる方です。(3) 神の真実さ＝神は罪のさばきを警告されただけでなく、罪のさばきを下して来られました。罪を憎んでいることを示しただけでもない、同時に、神のさばきが必ずあることを証明しています。神は言われたことを必ず守るお方だということです。

(4) 神の御力＝イエスは十字架に架かった後、そのおからだは墓に納められて、そして、三日後にその死から敢然とよみがえって来られました。その力を神は持つておられるということ、イエスの死からの復活は、神にはできないことが何一つないということを明らかにしているのです。

私たちはあのイエスの十字架を見た時に、神とはどんな方であるかを知ることができます。神の愛がどんな愛なのか？神は聖い方、罪をどれほど憎んでおられるのか？十字架を見ればいいのです。神は真実な方、約束を守るお方、十字架を見ればいいのです。必ず、神が言われたことが成されるのです。

そして、私たちが十字架を見てイエス・キリストの復活を覚える時に、神とはどんなことでも出来る全能のお方であると、そのことを学ぶのです。イエスの従順の歩みだけが神の栄光を現したのではないのです。あの十字架によって神がどんなお方であるかを明らかにされたのです。そうしてイエスは確かに父なる神の栄光を現されたのです。こんな偉大な神だということを十字架によって明らかに示されたのです。

3. 栄光への招き 33節

栄光を受けられた主、栄光を受けられた父なる神。そして、33節にはその「栄光への招き」が書かれています。「子どもたちよ。わたしはいましばらくの間、あなたがたといっしょにいます。あなたがたはわたしを捜すでしょう。そして、『わたしが行く所へは、あなたがたは来ることができない』とわたしがユダヤ人たちに言ったように、今はあなたがたにも言うのです。」、『わたしが行く所へは、あなたがたは来ることができない』と、このように言われたのはここが初めてではありませんね。実は、この箇所以外にすでに2箇所に亘ってイエスは同じことを言われています。ヨハネ7：32-34「:32 パリサイ人は、群衆がイエスについてこのようなことをひそひそと話しているのを耳にした。それで祭司長、パリサイ人たちは、イエスを捕らえようとして、役人たちを遣わした。:33 そこでイエスは言われた。「まだしばらくの間、わたしはあなたがたといっしょにいて、それから、わたしを遣わした方のもとに行きます。:34 あなたがたはわたしを捜すが、見つからないでし

よう。また、わたしがいる所に、あなたがたは来ることができません。」、8：21「イエスはまた彼らに言われた。「わたしは去って行きます。あなたがたはわたしを捜すけれども、自分の罪の中で死にます。わたしが行く所に、あなたがたは来ることができません。」と。この2回とも、イエスがお話しになったのは救いに与っていない人たちに対してでした。そこでイエスは「わたしがいる所に、あなたがたは来ることができません。」と言われたのです。イエスがいる天にこの人たちは来ることができないと、そのように言われたのです。

13：33のことは「子どもたちよ。」とイエスが愛する11人の弟子たちに言われたことが分かります。でも、同じように『わたしが行く所へは、あなたがたは来ることができない』と言われましたから、疑問に浮かぶことはこの人たちは救われていなかったのかということです。いいえ！彼らは救われていました。13：36をご覧ください。「シモン・ペテロがイエスに言った。「主よ。どこにおいでになるのですか。」イエスは答えられた。「わたしが行く所に、あなたは今はついて来ることができません。しかし後にはついて来ます。」とイエスはこのように言われました。弟子たちはまだこの地上に残されるのです。まだこの地上にあって務めがあるのです。イエスは天に凱旋されるけれど、その瞬間に「あなたたちがわたしについて来ることができない。でも、暫くすれば、後になるとあなたたちはわたしのいる所に来ます。」と言われたのです。

彼らは救いに与っていました。ですから、イエスはこんな約束を与えたのです。ある人たちには「あなたたちはわたしの行く所に来ることはできない」と言われました。それは彼らが救いをいただいていないから、拒んでいるからです。そして、弟子たちには「わたしの行く所に後にはついて来る」と言われました。信仰者の皆さん、あなたもどちらかです。イエスのもとに行ってイエスとともに永遠を過ごすのか、それとも、イエスから離れてサタンと永遠を過ごすのか、そのどちらかしかありません。中間状態はないのです。罪の赦しをいただいて神とともに過ごすのか、罪の赦しを拒んでサタンとともに永遠を過ごすのか、どちらかです。

イエスはこうして祝福への招きを与えてくださいました。今、どこにあらうと、これまでどんな罪を犯して来ようと、神はそれを赦してくださるのです。私たち一人ひとりが考えなければいけないことは、「自分はだれと、どこで永遠を過ごすか？」ということです。イエスはこのようなすばらしい祝福を与えてくださった。私たちに永遠という希望を与えてくださったのです。

B. 主が与えられた新しい戒め 34、35節

13：34-35「:34 あなたがたに新しい戒めを与えましょう。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。:35 もし互いの間に愛があるなら、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。」、ここでイエスのご自分が天に凱旋された後、残される信仰者たちに対して、残されるキリスト者に対して、神が何を望んでおられるかを明らかにされたのです。イエスは「あなたがたに新しい戒めを与えましょう。」と言われました。どんな戒めでしょう？「互いに愛し合いなさい。」という戒めです。

皆さん少し考えませんか？互いに愛し合うということは、新しい戒めなのかどうかです。旧約聖書の中を見た時に、自分の隣人を愛するようという事はもうレビ記の中に書かれています。レビ記19：18「復讐してはならない。あなたの国の人々を恨んではならない。あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい。わたしは【主】である。」、神からの命令としてこのように記されています。また、神を愛することは申命記にも記されています。申命記6：5「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、【主】を愛しなさい。」と。「隣人を愛すること」と「神を愛すること」、この二つは切っても切り離すことが出来ません。例えば、「私は神さまを愛しています」という人が隣人を愛することができなかつたらおかしいでしょう。もちろん、私たちの愛は不完全です。でも、神を愛している人は間違いなく隣人を愛する人であり、隣人を愛している人は間違いなく神を愛している人です。なぜそう言えるのか？

模範であるイエスを見てください。父なる神を愛してそのみこころに従って来られた。同時に、隣人を愛して来られた。ですから皆さん、確かに、旧約聖書を見た時に神を愛することも隣人を愛することも記されています。それでいてどうしてイエスはここで「これが新しい戒め」と言われたのでしょうか？イエスがもしここで、今まであなたたちが聞いてきた大切な戒めを今一度与えようと言われたのならよく分かります。これまで聞いて来たことだから、教えられて来たことだからです。でも、イエスがここで言われたのは「新しい戒め」ということです。でも、それは聞いたことのある命令です。なぜ、それが新しいと言えるのでしょうか？

◎どうして「新しい戒め」と言えるのか？ 34節

次の二つの点でそのように言えるのです。

1) 完全な模範が与えられたから

この命令を実践するための完全な模範が与えられたからです。旧約の時代には模範がありませんでした。「こうしなさい」と言われただけです。それでも人々はそれを守ろうとしました。イエスはここで「互

いに愛し合いなさい」という新しい戒め、命令を与えたのですが、完璧な模範が彼らの前に示されたのです。それは主イエス・キリストご自身です。

ですから、ヨハネの福音書15章を見てください。15：12「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合うこと、これがわたしの戒めです。」とあります。弟子たちは主がどのような愛によって自分たちを愛してくださったのか、後に、イエスの十字架を見た時にこれほどまでの愛をもって自分たちを愛してくださったということを知り、そして、それに倣って神を愛し隣人を愛そうと決心し、そのように生き始めて行くのです。完全な模範が自分たちの前に示されたからです。

ヨハネの手紙第一の3：16には「キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。ですから私たちは、兄弟のために、いのちを捨てるべきです。」と、3：23にも「神の命令とは、私たちが御子イエス・キリストの御名を信じ、キリストが命じられたとおりに、私たちが互いに愛し合うことです。」と書かれています。ヨハネの福音書を記したヨハネはこのヨハネの手紙の中で、イエスが私たちのためにいのちを捨ててくださった、それによって愛がどのようなものが分かった、だから、私たちも兄弟のためにいのちを捨てるべきと言ったのです。キリストが示してくれたそのような愛をもって互いに愛し合うこと、イエスの完璧な模範をもってこの戒めが与えられたのです。だから、「新しい戒め」です。イエス・キリストという完全な模範を通してこの戒めが新たに与えられたのです。「わたしがあなたを愛したようにあなたも愛しなさい」と。

2) 完全な助け手が与えられたから

さて言われていることはよく分かりました。神の愛をもって神を愛し隣人を愛することだと…。でも、確かにこれはハードルとして高すぎますね。「愛すること」も「赦すこと」も、私たち罪人にとっては大変難しいことです。でも、確かにイエスはそのことを私たちに命じられたのです。「主の愛に倣ってその愛を実践しなさい。兄弟姉妹がその愛をもって互いに愛し合っていくなさい。」と言われたのです。イエスは私たちに不可能なことを言われたのでしょうか？違いますね！イエスは私たちの弱さを分かっておられないのでしょうか？違います。イエスは私たちの不信仰さを分かっておられないのでしょうか？違います。私たちの弱さも私たちの不信仰さも分かっているとされます。私たちがすぐにつぶやく者であることも分かっておられます。それでいて神はこの命令を私たちにくださったのです。

それはなぜですか？あなたにも私にもこの実践が可能だからです。私たちが知らなければいけないことは「では、どうすればいいのか？」ということです。マタイの福音書5章をお開きください。山上の説教でイエスが語られているところです。5：43、44「：43『自分の隣人を愛し、自分の敵を憎め』と言われたのを、あなたがたは聞いています。：44しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。」今見て来たように、イエスはハードルを上げられたのです。これまでは自分の敵は例外でした。自分の敵、それ以外を愛しなさいと言われていました。でも、イエスは「わたしはあなたがたに新しい戒めを与える。自分の敵を愛しなさい。」と言われたのです。

皆さん、想像してください。この「愛する」ということばは原語ではどんなことばが使われているのでしょうか？これは人間間の愛のことではありません。ここには「アガペー、アガパオ（動詞）」が使われているのです。つまり、「神の愛」をもって愛するということです。しかも、これは現在形の命令です。継続して愛し続けていきなさいということなのです。

私たちがよくすることは、この人は愛することができるけど、あの人は愛することは難しいとして、自分の中でその人を決めていることです。私たちが覚えなければいけないことは、そのようなことはこの神の命令に逆らっているということです。神が言われているのは「あなたの一番愛せない敵であっても愛しなさい。しかも、神の愛をもって愛しなさい。しかも、継続して愛しなさい。」です。

私たちにとっては益々この実現において不可能と思える条件が出されました。先程も見たようにこれは本当に不可能なことでしょうか？いいえ、実現可能なのです！！Ⅱテサロニケ1：11を見てください。「そのためにも、私たちはいつも、あなたがたのために祈っています。どうか、私たちの神が、あなたがたをお召しにふさわしい者にし、また御力によって、善を慕うあらゆる願いと信仰の働きとを全うしてくださいませように。」とあります。見てください。「あなたがたをお召しにふさわしい者にし」と、いったいだれがそのことをしてくださるのですか？みことばは「私たちの神が、」と書いています。また、いったいだれが実現させてくれるのですか？「また御力によって、」と言います。だれの力ですか？人の力ですか？「神の力」です。それが神のメッセージなのです。あなたがクリスチャンとしてふさわしく生きていくためにそれを可能してくださるのが神なのです。あなたが望んでいるように、神に従って行くその力はどこから来るのか？神からです。神の力によって可能だと教えているのです。ご覧になりましたか？

今日のテキストに戻ってください。イエスはこの命令を与えました。そして、弟子たちはそれを聞いていてイエスが自分たちの所からいなくなってしまうと悟った時に、彼らは大変心が騒いだのです。不安になったのです。そこでイエスはこのように言われました。ヨハネ14：1「あなたがたは心を騒がしては

なりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。」と。弟子たちは心を騒がせていたからです。この14章のメッセージの中で主イエスは弟子たちに何を教えたのでしょうか？16節に「わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。」と書かれています。イエスは心騒がせていた弟子たちにさらにすばらしい約束を与えてくださるのです。「助け主を与える」とはおもしろい表現だと思いませんか？この方がだれか？聖霊なる神です。なぜ、主はここに「もう一人の神、三位一体の神を与える」と言わなかったのでしょうか？なぜ、敢えて「助け主」ということばを使ったのでしょうか？このことばは「あなたの傍らにあってあなたを助けてくれる存在」という意味です。あなたの傍らにいつもいてあなたを助けてくれる存在なのです。

弟子たちは思ったのです。ずっといっしょに生活をしてきたイエスがいなくなってしまうらどうなってしまうのか？もしかすると「神さまは私たちを見捨てるのか？こんな大変な世の中であってイエスさまがいても大変だったのに、イエスさまがいなくなったらどうなってしまうのか？」と思ったかもしれません。不安が増したかもしれません。でも、イエスは彼らに対する愛を変えることはなかった。むしろ、彼らにとってより良いことをしてくださったのです。イエスがともにいた時は、確かに、イエスは全知ですが、でも、イエスのからだはある限られた所にしかいなかった。弟子たちといっしょにいたのです。でも、聖霊はそうではありません。聖霊は信者がどこにいてもその信者といつもともにいてくれるのです。何のために？あなたを助けるためにです。ヨハネ16：7にはこのように書かれています。「しかし、わたしは真実を言います。わたしが去って行くことは、あなたがたにとって益なのです。それは、もしわたしが去って行かなければ、助け主があなたがたのところに来ないからです。しかし、もし行けば、わたしは助け主をあなたがたのところ遣わします。」と。

神のご計画がお分かりになりますか？神は私たちに互いに愛し合いなさいと言われました。キリストの愛をもって愛し合いなさいと言われました。しかも、その愛というのはすべての人に示されていました。互いに愛し合うという働きを助けてくれる人が与えられたのです。聖霊なるお方です。イエスが天に凱旋された後、その聖霊が与えられたのです。イエスを信じるあなたとともに聖霊がいてくださる。そして、その聖霊なる神の助けをもって、私たちは神のみこころに従うことができるのです。そのような人生を歩む者へと私たちは生まれ変わったのです。

◎完全な証がなされる 35節

今日のテキストの最後、35節「もし互いの間に愛があるなら、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。」。すべての人々が知ることです。あなたがたがわたしの弟子であること、つまり、クリスチャンだということ、救われているということです。私たちはどのようにしてイエスのすばらしさを世に証していくのですか？当然、私たちはみことばを語っていくことによってそのことを明らかにします。でも同時に、みことばが教えることは、私たち信仰者が互いにキリストの愛をもって愛し合うことによって、世の人々に対してイエス・キリストこそが真の神だということを明らかにすることです。その証のために愛し合いなさいと言われるのです。確かに、新しい戒めです。なぜなら、イエス・キリストの模範が示されて、その模範に倣って生きるようにと与えられた命令だからです。

同時に、聖霊なる神の助けをいただきながらこの命令を守っていくこと、その点においても新しい戒めなのです。完璧な模範が示された。どう生きるか？ということです。そして、その歩みを為すために必要な助け主が与えられています。皆さん、聖霊が与えられて、聖霊はどんな働きを始めたのか？私たち信者をイエス・キリストに似た者に変えていくというその働きが始まったのです。イエスが私たちにとって完璧な模範だからです。その人を見て生きるだけでなく、その人に似た者に変えられていくのです。そのために聖霊が与えられたのです。だから「わたしの言うことを行いなさい」と言われたのです。

「できない」ということは止めましょう、あなたはできないのです、当たり前です。神にあってできるからです。つまり、あなたが「できるかできないか」を判断するのではないのです。神が言われたことをその通り受け入れるかどうかです。全能なる神が「こうしなさい」と言われたことをあなたが心から受け入れてそれに従うかどうかです。そして、それをあなたが始めるまで神の働きは期待できないのです。神が言われたことを信じない人にどのようにして神が働きますか？神が働きを躊躇し留められているではありません。あなたが留めているのです。私たちが学ばなくてはいけないことは、みことばを通して神のみこころを知り、そのみこころに従って行くことです。私たちが望むことは「主よ。どうかあなたが望むことを行いますから助けてください。」と、そのようにして生きるのです。神に働いていただかなければ神のみこころに従うことはできないのです。そのために私たちは決心しなければいけません。主を信じて従うのか？それとも信じないで逆らうのか？どちらかです。

人生を無駄にすることのないように、皆さん、神がおっしゃったことを信じることです。そして、神に

働いていただくのです。その時にあなたの家庭においても職場においても学校においても、そして、教会においても神のすばらしさを証する器として神はあなたを使ってくださいなのです。そんな人生を生きることができるのです。そんな人生を歩めるのです。あなたのためではありません。神のためです。神の栄光のためにです。その決心をもってこの1週間を歩みましょう。神の働きを期待するそんな信仰者として、神のみことばに従う決心をもって今日から歩んでください。

このメッセージをイエスはお語りになりました。この後、ペテロが主を三度知らないかと否定することが話されますが、最後に話されたのが聖餐式のことだったのです。どうして繋がるか分かりますか？このイエス・キリストをいつも覚え続けることが必要だからです。そのために聖餐式のことを話されるのです。今から私たちはこの聖餐式のパンと杯をいただきますが、これを食することに何の力もありません。大切なことは、イエス・キリストの十字架を見上げることです。もう一度、イエスの十字架を思い起こすことです。主は私のために何を為してくださったのか？そして、その上であなたはその主にどう答えて行くのかです。先ず、あなたの心の中にあるすべての罪を告白して、主に心からの感謝をもってあの十字架の象徴であるこのパンと杯をいただき、新たな決心を持っていただきたいと思います。